

## けものをもとめて

縄文時代の最初の頃は、旧石器時代と同様、獣を突くヤリが使われていましたが、徐々に弓矢に変わっていきます。

ヤリ・弓矢ではケモノを一撃で仕留めることは難しいでしょう。ヤリや矢を射かけて、ケモノが弱るのを追いかけて、待っていたと思われます。しかし、縄文人はケモノの後を追いかけていただけではないようです。



落とし穴の復原図



杭跡を残す落とし穴（天若遺跡）

南丹市<sup>あまわか</sup>天若遺跡では、直径1m前後の大きさ、深さ50cmほどの穴が数多く見つかりました。この穴の底の中央には杭を固定したと推定される穴がありました。このような穴は集落の周囲で見つかり、ケモノを捕獲するための「落とし穴」と考えられています。

山に入ると草や樹木が途切れ、道になっているところがあります。これが「けものみち」と言われるものです。縄文人はそこに落とし穴をつくり、穴に落ちたケモノを槍で捕獲したと想像できます。（石井清司）